

佐野鼎学ぶ講演会

11月10日にラ・ホール富士

富士郡水戸島村(現富士市水戸元町)出身で、全国有数の名門として知られる開成中・高(東京)の前身となる共立(きょうりゅう)学校の創設者・佐野鼎をテーマとした講演会が11月10日(日)午後1時半から、中央町のラ・ホール富士2階多目的ホールで開催される。

県東部開成会と佐野鼎研究会が駿河郷土史研究会と共催、郷土史研究家の高田國義さんと佐野鼎の一生を描いた小説『開成をつくった男 佐野鼎』の著者柳原三佳さんが講演する。

高田さんは「佐野鼎の誕生地とその先祖」をテーマに、分かっていない部分が多い幼少期や出自などに関する研究の成果を講話する。

柳原さんは「二冊の古書から始まった開成をつくった男、佐野鼎の人生を辿(たど)る旅」と題し、執筆の経緯や見どころ、国内外での調査中に発見した佐野鼎の足跡を紹介する。参加者には『開成をつくった男 佐野鼎』を贈呈する。

▽電話番号▽アクセス
入場無料だが、申し込みが必要(先着250人)。参加を希望する人はアクセスまたはEメールに▽住所▽氏名(ふりがな)▽年齢(jcom.zaq.ne.jp)。

『開成をつくった男、佐野鼎』著者 柳原三佳さんにインタビュー

昨年末に発売された『開成をつくった男 佐野鼎』は、開成中・高校の前身である共立学校を創設した佐野鼎の一生をつづった大河小説。著者の柳原三佳さんに5年近くに及ぶ文献調査や取材の経緯、佐野鼎の知られざる人物像について聞いた。

「母方である佐野家の分家の先祖に当たります。幼い頃、祖父から先祖に暮末に活躍した人がいるという話を聞かされたことが、業績や人物像など、詳しいことは何も知りませんでした」

「二冊の古書と出会ったのは、昭和21年に金澤文化協会から出版された『佐野鼎遺稿 万延元年訪米日記』を偶然発見し、購入。手元に届いた日記は半紙のような粗悪な紙に印刷されたものでしたが、佐野鼎の人物像が分かる記述もあり、目からうろこでした」

「日記の内容は、万延元年(1860)に遣米使節団としてサンフランシスコ、パマナなどを経て、ワシントンを目指した行程が細かく書き残されています。初めて見る蒸気機関車や水洗トイレ、街灯などへの驚きが伝わってきました」



柳原三佳(やなぎはら・みか)。京都府生まれ。ジャーナリストとして交通事故、司法問題などをテーマに執筆。著書に『巻子の言霊と愛と命を紡いだある夫婦の物語』(講談社)ほか多数

佐野鼎の年譜

- ▽文政12年(1829)：富士郡水戸島(現富士市水戸島元町)に誕生
- ▽弘化元年(1845)：幕臣下曾根金三郎の塾に入門し西洋砲術を学ぶ
- ▽安政4年(1857)：砲術師範として加賀藩に出仕
- ▽万延元年(1860)：遣米使節団に参加
- ▽文久元年(1861)：遣欧使節団に参加。帰国後は加賀藩で西洋砲術を指導
- ▽明治3年(1870)：兵部省に出仕し造兵正(兵器廠長官)に就任
- ▽明治4年(1871)：神田淡路町に共立学校を創設し、英語教育に注力。身分や男女の区別のない教育体制を実現した
- ▽明治5年(1872)：兵部省を退官し共立学校の教育に専念
- ▽明治10年(1877)：コレラにより死去

「興味をひかれた記述は『フィラデルフィアでは大学を訪問。高い教育水準や立派な図書館を目の当たりにし、教育の重要性を実感したようです。西洋列強を見聞し、教育こそが国を豊かにすると確信したのでないでしょうか。後に彼は教育者の道を歩みますが、使節団への参加は彼の人生を決定付ける大きな出来事でした」

「日記から分かった佐野鼎の人物像

「身分が低くても能力がある人を評価する姿勢を日記の端々から感じ、弱い立場の人々に対する優しいまなざしがある人物だと思いました。元治元年(1864)には天狗党の乱(※)の鎮圧に携わりますが、その際に首領の武田耕雲斎の妻子・源五郎の助命に尽力した可能性がります。また、アメリカで行われていた聴覚障害者に向けた教育への感動や

選挙でリーダーを選ぶことへの新鮮な驚きなど、公明正大な人柄が伝わってきました」

「後世に与えた影響

「加賀藩に出仕していたときには外国人教師を雇い、最先端の知識を少年たちに授けました。そのときの生徒に、現在でも胃腸薬に用いられる酵素『タカヂアスターゼ』を創製した高峰譲吉がいます。佐野鼎は明治10年に49歳の若さで亡くなりましたが、彼の育てた人材が日本の近代化を支えた偉人として羽ばたいていく。そこに教育のロマンがあるのではないでしょうか。元々は戦争の専門家として取り立てられたものの、見聞を深め、最終的には人を仕立てることが肝要に感じます」と語っています。人材の育成に心血を注ぐという彼の人生を多くの方に知っていただければうれしいです」

「調査開始はいつ頃

「日記を入手して、3年後の平成26年です。最初は日記をかみ砕いて児童書にしようと考えていたのですが、出版社の方から『これは歴史小説で出しましょう』と言われ、本格的な調査を始めました」

「調査の手順は

「佐野鼎ノットクを作り、見つけた資料を時系列で書き記す作業から始めました。国会図書館や国立公文書館をくまなく探すのはもちろん、彼が加賀藩に仕えた時代の資料を見つけるために金沢の図書館にも通いました。また、使節団に参加した人の日記を横断的に読み、彼を取り巻く人間関係を調べました」

「実地調査は

「作中で街並みや建物、風景などを描写するには、実際にその場所を訪ね、観察する必要があります。東京や金沢、静岡、長崎など、国内の足跡はほぼ全てたどりましました。海外ではアメリカはもちろん、スリランカ、シンガポールなどを調査しました。ワシントンやニューヨークには当時のままの建物も多く、とても参考になりました」

「富士近辺での調査は

「残念ながら本人が書いた文書はほぼ残っておらず、幼少期は不明な部分だらけです。郷土史家の高田國義さんの研究成果などを読み、真相(岩本)や水戸島の寺社など、ゆかりの地を訪ねました。司法関係のノンフィクションを専門としているが、初めての歴史小説に戸惑いは

「文献や史料の中には不正確な記述も多く、一つ一つ裏付けする必要があります。例えば、開成中・高校がシンガポールで出会った日本人漂流民・音吉の娘の墓は、後世の修復時に没年が間違っていたと書き記されてしまいました。鼎の娘と音吉の娘は偶然にも同じ命日で、作中でもドラマの題材にしているのですが、もしも間違っていたら盛り返めなかつたエピソードでした」

「執筆での苦労は

「直接佐野鼎に取材できる訳ではないので、描写はどうしてもフィクション。調査で分かった事実を土台に、その上に物語を仕立てていくのが難しかったです」

(※)水戸藩の尊攘派天狗党が拳兵した事件

ピクアミップ